

論文審査の要旨

報告番号	総論第 14 号	学位申請者	谷本 洋一郎
審査委員	主査	金蔵 拓郎	学位 博士 (医学・歯学・学術)
	副査	出雲 周二	副査 有馬 直道
	副査	松山 隆美	副査 松下 茂人

Presence of keratin-specific antibody-forming cells in palatine tonsils of patients with pustulosis palmaris et plantaris (PPP) and its correlation with prognosis after tonsillectomy

(掌蹠膿疱症患者の口蓋扁桃におけるケラチン特異的抗体産生細胞の存在と口蓋扁桃摘出術後の予後との関連性)

掌蹠膿疱症 (PPP) は手掌、足蹠に無菌性小膿疱が多発し、寛解・増悪を繰り返しながら炎症性角化局面を形成する慢性、難治性の皮膚疾患であり、口蓋扁桃摘出術が有効であることから扁桃病巣感染症として認識されている。しかし術前に手術の有効性を正確に予測できる検査診断法はいまだ確立していない。

PPP 症例では血清中のケラチン特異的抗体価が高値であり、ケラチン特異的免疫応答が PPP の病態に関与していると考えられている。しかし、PPP の口蓋扁桃においてケラチン特異的免疫応答が亢進しているのか、またそれに伴って血清中にケラチン特異的抗体が産生されているかについては、いまだ明らかにされていない。そこで、本研究では口蓋扁桃におけるケラチン特異的免疫応答が PPP の発生に果たす役割を検討した。

PPP 患者 18 例および対照として慢性扁桃炎患者 10 例を対象とし、扁桃単核球細胞 (tonsillar mononuclear cell, TNMC) と末梢血単核球細胞 (peripheral blood mononuclear cell, PBMC) を用いて、口蓋扁桃および末梢血中にケラチン特異的抗体産生細胞 (antibody forming cell, AFC) が存在するかどうかを確認し、さらにこれらの細胞数と血清中のケラチン特異的抗体価の相関を観察した。また、口蓋扁桃および末梢血のケラチン特異的免疫応答と口蓋扁桃摘出術後の経過を改善群、非改善群で比較した。

その結果、本研究で以下の知見が明らかにされた。

1. 対照群と比較して PPP 症例では口蓋扁桃のケラチン特異的 IgM-AFC、IgG-AFC および末梢血の IgG-AFC の数が有意に上昇しており、また血清中ではケラチン特異的 IgM、IgG 抗体価が有意に高値を示した。
2. 末梢血のケラチン特異的 IgG-AFC 数は、口蓋扁桃のケラチン特異的 IgG-AFC 数および血清中のケラチン特異的 IgG 抗体価と正の相関が認められた。
3. 非改善群に比べ改善群では、口蓋扁桃、末梢血におけるケラチン特異的 IgM-AFC、IgG-AFC 数が有意に上昇しており、血清中ではケラチン特異的 IgG 抗体価が有意に高値であった。
4. 術後 6 カ月で、末梢血のケラチン特異的 IgM-AFC、IgG-AFC 数および血清中のケラチン特異的 IgG 抗体価は有意に減少しており、その減少は改善群できわめて顕著であった。

以上のことから、PPP ではなんらかの機序により口蓋扁桃におけるケラチン特異的免疫応答、とくに IgG 応答が優位に亢進しており、さらに改善例では口蓋扁桃摘出後、その IgG 応答は有意に低下することが明らかになった。したがって口蓋扁桃が末梢血のケラチン特異的 IgG-AFC の主たる産生部位であり、これが PPP の病態に関与していることが示された。

本研究は掌蹠膿疱症の発症機序について検討したものであり、手術の効果を予測する検査診断法の一つとなり得る可能性を示している。よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。